

<私はどのようにして絵を描くようになったか。>

山下寛二

私は決して絵の才能があるものではありません。今も変わりません。ただ、描きたい気持ちが時々起きるだけです。だから、絵を描いていますと言えないのだと思います。

ご要望がありましたので平凡ですが、ありのままを書かせて頂きます。1980年、私は40歳ごろ支店の営業で急性肝炎になり本社事務職へ転勤いたしました。毎日多忙ではありましたが、人と接する機会が少なくなりました。

それだけ自分のことを考える時間が出来、同じビルの本屋へ行くようになりました。その頃、講談社から「グランド世界美術」と言う大判の絵画集が発刊されました。年を取り暇ができたなら世界の天才画家の絵をゆっくり眺めたいと思い、それが丁度2ヶ月に1冊頻度の出版でしたから50巻くらいの先を目指して買い始めました。

それまでに海外旅行をする機会があれば、出来るだけ有名な美術館を訪問するようにしていました。

今思い出されるのはルーブル、ウフィッツ（フィレンチェ）、バチカン、ブラード、ソフィヤ（マドリッド）、エルミタージュ（サンクトペテロブルク）、アムステルダムくらいです。あの大胆なデザインと鮮やかな色使いは記憶に残りました。

60代になり海外旅行も体力的に出来なくなり、友人に絵画教室をしつこく勧められました。

油絵にあこがれてはいたのですが、2003年から2021年まで18年間原則週1回行って見て、未だに自由に描けるようになったとは思えません。

それでも、もうやめようとは思いません。それはどんな人にもあると思いますが、美しいものを求める心が止まないからだと思います。

人は常に美しい人・動物、美しい山や海、川の自然等々を求めて止みません。そして、ともすると人は、それを自分のものとして所有したい欲望を持ちます。

然し、現実的にそれは不可能なのが普通です。私の場合はその欲望を、画版の上に描いて所有欲を代替満足させるのだと自分を納得させています。

私の能力では殆どの場合不満足に終わりますが、それでもいつかは欲望のレベルにもっと近づけるといふ希望をまだ捨てきらずにいます。

それが、私の生き様なのかもしれません。

ご拝読、感謝いたします。

以上



